

京都精華大学

2022年度 入学試験問題

座席番号

【小論文】(2月5日)

時間 14時30分～16時

【注意】

- 一、解答はすべて「解答用紙」に書くこと。
- 二、用具は黒鉛筆またはシャープペンシル(H、F、HB、B)、消しゴム、鉛筆削り用具のみとし、それ以外の使用は認めない。
- 三、出題に関する質問は受け付けない。

*この問題用紙は座席番号を記入の上、試験終了後返却すること。

【問題】

次の文章は、藤原辰史、内田樹他著『「自由」の危機―息苦しさの正体―』（集英社新書 二〇二一年）の一部で、山崎雅弘氏が「守るべきは自由」とのタイトルで書いているものです。文章を読んで、以下の設問に答えてください。

自由のすばらしさを教わらない日本の子どもたち

読者から初めて著書にサインを求められた時以来、私はいつも、決まった言葉を添えています。

その言葉とは、「守るべきは自由」。

自分と自分の住む社会が守るべきだと思うものは、ほかにもいくつかあります。戦争の対極としての平和、一人ひとりの権利が尊重される民主主義など。

ですが、それらの土台にあるのは、人間の思考や発言、表現、行動などを理不尽に制限されないという意味での「自由」だと私は考えています。

一〇年前の二〇一一年と、現在の二〇二一年を比べると、日本では明らかに、この「自由」のサイズが社会の中で小さくなったように思います。

例えば、国際的なジャーナリストの非政府組織「国境なき記者団」が、さまざまな観点から各国の「報道の自由度」を評価するランキングにおいて、日本は二〇一〇年には世界で一位と評価されていましたが、二〇一三年には五三位、二〇一六年には七二位に転落し、二〇二〇年の順位も一八〇カ国（／地域）中の六六位という、一〇年前と比べると大きく下がった順位に留まっています。

ちなみに、政権与党が民主党から自民党に切り替わったのは、二〇一二年の一月でした（第二次安倍政権の発足）。

この「報道の自由度」ランキングにおける日本の順位の急落は、日本国内ではあまり話題になっていません。「報道の自由」が失われれば、自分の生活にも大きなマイナスになると理解している人が、日本では少数派であるように見えます。「報道の自由」とは報道の仕事をする人だけに関係のある話だ、と勘違いしているのかもしれませんが。

同様に、「言論の自由」や「表現の自由」「学問の自由」などについても、ごく限られた人にだけ関係のある話だと理解して、自分の生活を取り巻くさまざまな権利につながる話だとは思わない人が、おそらくいまの日本では多数派でしょう。

なぜそんな風潮になるのかは、この一〇年、二〇年、あるいはそれ以上の期間における、

日本の学校教育を見れば明らかだと思います。

ヨーロッパなどの民主主義国では、小学校から、いろんな分野での「自由」の価値と、それを守らないといけない理由について、当事者意識と共に子どもに教えています。しかし、日本の学校では一部の例外を除き、子どもが自分の生活に大きく関わる身近な問題として「自由」の価値を学べるような教育制度にはなっていません。

むしろ、子どもの「自由」を不必要に制限する「校則」への服従を強制して、あたかも「自由」という概念が「自分勝手」や「わがまま」であるかのような、マイナスの観点を植えつける教育が一般的であろうと思います。そんな学校で教育を受けた子どもは、「自由」のすばらしさを知らず、それを守るべき理由も理解できないまま成長します。

・・・・・・・・・・・・・・・・(中略)・・・・・・・・

なぜ人間は自発的に「自由」を手放してしまうのか

日本の社会で、「自由」よりも「秩序」を重視する価値観が根強い理由は、先に挙げた教育だけが原因ではないようにも思います。

社会の「建前」では、人は誰でも「自由」を望むものだ、ということになっています。けれども実際の世の中には、自分が持つ「自由」を少しでも大きくしたいと思う人と、そうでない人の、二種類の人が存在しています。

そうでない人、というのは、例えば、一人ひとりが「自由」に生きるよりも、大きな集団の「秩序」に身を委ねた方が自分にとって心地いい、と思う人のことです。

第二次世界大戦の最中、ナチスドイツの迫害を逃れてアメリカに亡命した、ユダヤ系ドイツ人の心理学者エーリッヒ・フロムは、一九四一年に上梓した『自由からの逃走』という著書の中で、当時のドイツ人がなぜ、人々の「自由」を国家に献上させるヒトラーの政治体制をあれほど熱狂的に支持したのか、なぜ自分の持つ「自由」をいとも簡単に捨ててしまったのかについて、人間の心理を掘り下げる形で分析しています。

彼の分析によれば、人々が「自由」を捨てて「全体の秩序」を選んだ大きな理由は、孤独感からの解放でした。第一次世界大戦でドイツ帝国が敗北し、ドイツ国民は皇帝を頂点とする窮屈な国家体制から解放されて「自由」になりました。人々は、しばらくの間、その「自由」を謳歌しました。しかし、一人ひとりの人間が、何をしてもいい、という「自由」は、人々の心から「大きな集団に帰属している」という一体感や安心感を取り去って孤独感を味わわせるという、マイナスの効果ももたらしました。

そんな中で、経済恐慌などが起きて生活が危機に直面し、将来の見通しが立たなくなると、

ドイツの人々は不安を解消する手段として、もう一度「大きな集団に帰属している」という一体感や安心感を得たいと思うようになりました。その結果、国民から「自由」を取り上げる代わりに「大きな集団に帰属している」という一体感や安心感を国民に与えてくれる、ナチ党（国家社会主義ドイツ労働者党）が絶大な支持を集めたのでした。

この成り行きを見て、どこかで似た話があったな、と思われませんか？

一〇年前の二〇一一年三月一日、東日本大震災と福島第一原発事故が起き、日本国民は将来の見通しや、技術大国としての自信を失い、不安な心境が社会に広まりました。その時、NHKなどのメディアが盛んに用いたのが「絆」という言葉でした。

この「絆」とは、実質的には「大きな集団に帰属している」という一体感や安心感を指す言葉でもあります。孤独感から逃れ、自分は一人ではないのだ、大きな集団の一部なのだ、と思わせてくれる「絆」のイメージは、日本人の心理を「自由」より「秩序」を重んじる方向へと、少しずつ変えていったように思えます。

「自由」を手放した後に待っている道

ここで改めて日本人が思い出さないといけないのは、日本が過去に「自由」よりも「秩序」を優先する道に進んだ時、最後にどんな結果へ行き着いたかという歴史です。

集団全体が、一糸乱れず足並みを揃えて、同じ行動をとって、同じ方向へと進む。

こうした光景は、一見すると、集団全体の持つ力が高まったような印象を受けます。

けれども、国民が持つ「自由」よりも「秩序」を優先する道は、次に「人の生活」よりも「秩序」を優先する段階に入り、やがて「人の命」よりも「秩序」を優先する段階へと進んでいきました。国民が「自由」を手放すことは、その先にある「人の生活」や「人の命」をも手放すことにつながる。これが、昭和期の大日本帝国やナチスドイツの歴史が我々に教えている、重要な教訓です。

昭和期の大日本帝国やナチスドイツは、自国民が「言論の自由」や「学問の自由」を持つことを許さず、国家の指導部が正しいと見なした言論や学問だけを、国民に許す方針をとりました。その結果、国全体が間違った方向へと少しずつ進み始めても、それを軌道修正する動きがほとんど生じず、そのまま破滅へと直進していきました。

軌道修正する動きというのは、例えば普通の市民が「我々の国は道を外れているのではないか」という疑問を口にしたたり、学者が専門的見地から「このままいまの針路をとれば、やがて国は危機的な事態に陥る可能性がある」と警鐘を鳴らしたりする行為です。

一九三七年七月に日中戦争が始まると、近衛首相は当時の政界と財界、そして大手メディア（新聞各紙と通信社、NHKラジオ）の幹部を首相官邸に招いて「懇談会」を開き、中国

への武力行使という政府の方針に協力するよう要請しました。これを受けて、新聞もNHKラジオも通信社も「報道の自由」を自ら捨てて、政府の発表をそのまま無批判に報じたり、政府にとつて都合の悪い事実を報じずに済ませたりするようになりました。

しかし、日中戦争が勃発してから数カ月の間は、首相の懇談会に幹部が招かれなかった雑誌の一部に、政府と軍の方針に疑問を差し挟む内容の記事が掲載されていました。

例えば、論壇誌の一つ「文藝春秋」一九三七年一〇月号では、評論家の杉山平助が「戦争とヂャーナリズム（ジャーナリズム）」という記事で、戦時においてジャーナリズムが担うべき役割と「批評の自由」が必要な理由について、率直に意見を表明していました。

「現実においては、指導者の判断力のみが、常に絶対に誤りがないとは保証されがたい。（中略）指導者側に、重大な誤謬ごびやうが犯された時に、ジャーナリズムはこれを批判すべき義務がある。それは国家の大局から見ての義務である。

しかるに、ジャーナリズムの批評の自由を極端に拘束せられると、誤謬は誤謬のままに進行して、重大な結果を招かないとも限らない」

「自由を守る」と「生活や命を守る」と

その後、日本がどんな方向へと進んだかは、皆さんご存じの通りです。一九四一年一二月に、日中戦争が太平洋戦争へと拡大した後も、日本には「報道や批評の自由」が事実上ありませんでしたが、それは政府にとつても国民にとつても大きなマイナスでした。

この歴史が示すように、「自由」とは集団全体の利益に反するものではなく、むしろ長期的に見れば、集団全体の安全と安定性を保つために必要なブレーキやバランスの役割を果たすこともある、重要な「力」です。

ところが、日本ではそうした「力」の認識がこの一〇年で以前よりもさらに軽視され、「言論の自由」や「学問の自由」が少しずつ失われていく状況にも、さほどの危機感を抱かない国民が多数派であるように見えます。

学校で、「自由」の価値やすばらしさ、おかしいと思った時に自分一人であっても「おかしい」と口にする勇気を教える教育をしてこなかったツケが、長い時間をかけて大量に積み重なった結果、「自由」よりも「秩序」を当たり前のように優先順位の上位に置く社会が、強固な形で構築されてしまったようです。

集団全体の「秩序」を優先する思考とは、集団の上位者である政府や上司の言うことに逆らわず、ひたすら従うことを良しとする考え方です。上位者の判断に異を唱えたり、間違いを指摘する行為は、集団全体の「秩序」を乱す悪事と見なされるからです。

社会を見渡してみれば、そのような光景が、あちこちで生じていることがわかると思いま

す。「自由」よりも「秩序」を優先順位の上位に置く流れが加速すると、もう誰にもその流れを止めることはできなくなります。かつての日本がそうであったように。

そんな流れを止められるのは、まだ流れの勢いが弱いうちだけです。

また、「自由」を軽視する社会とは、そこに生きる人や生き方の「多様性」をも軽視する、あるいは認めない社会を意味します。いろんなタイプの人が、いろんな生き方を選択できる社会を目指すというのが、いまの世界の趨勢すうせいであるように思いますが、社会や文化に関わる性別（ジェンダー）の問題も含め、日本の社会は「多様性」に不寛容で、それを認めれば「家族の絆」などの「秩序」が乱れるという主張もよく見かけます。

失ってからその価値に気づかされるものは、世の中に数多く存在しますが、その中でも特に重要なのは「自由」です。いまを生きる我々は、八〇年前の日本人が知らなかった、国民が「自由」を手放す道の行き着いた先を知っています。

守るべきは「自由」。その行為は、人の生活や人の命を守ることでもあるのです。

（※本文は出題の都合上、一部変更した箇所がある）

〔設問1〕

筆者は日本で自由が最近失われつつあると感じていますが、その背景にどのようなことがあると筆者は考えているか、一五〇字以内でまとめてください。

〔設問2〕

筆者が考える「守るべきは自由」について、あなたの考えを六〇〇字以内でまとめてください。